

関西学院大学 研究成果報告

2019年 5月 31日

関西学院 院長殿

所属：社会学部
職名：教授
氏名：西村正男

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国：台湾 ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	中国語圏のメディア文化史—音楽メディア・対日関係の視点から
研究実施場所	国立台湾大学音楽学研究所
研究期間	2018年 4月 1日 ～2019年 3月 31日（ 12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

今回の学院留学期間において、私は国立台湾大学音楽学研究所に在籍して調査研究を行った。受け入れ教員は山内文登副教授であるが、私は共同研究やシンポジウムなどを通じて、山内氏以外にも音楽学研究所の教員である沈冬教授、王櫻芬教授、楊建章副教授・所長らとすでに面識があった。そのため、滞在中はこれらの研究者の支援を得ることができた。

滞在中は、国立台湾大学図書館のデータベース上にある資料の収集に努めた。利用したのは、上海の新聞『申報』や台湾の新聞『聯合報』のデータベース、あるいは台湾の各新聞社の記事を集めた「台湾新聞智慧網」などの新聞記事データベースである。その他、雑誌記事のデータベースである「中文期刊全文データベース」も利用した。これらにより、中国語映画や流行音楽に関する多くの資料を得た。その他、音楽学研究所の研究者や大学院生との交流において、研究上のヒントを得ることもできた。

また、音楽学研究所においては「二戦後の李香蘭以及她的兩個接班人——胡美芳與葛蘭」（第二次大戦後の李香蘭と二人の後継者—胡美芳とグレース・チャン）と題する講演を行ったほか、授業「戦前東亜唱片工業史」（王櫻芬・山内文登）のゲストスピーカーとしてトルストイ『復活』の中国語圏における受容と音楽との関係についての講演を行うと同時に、受講者に対してアドバイスを行った。国立清華大学台湾文学研究所においても「1970年代日本流行樂壇上的華僑歌手：以台灣出身者為例」（1970年代の日本の流行音楽シーンにおけ

る華人歌手—台湾出身者を例として)と題する講演を行った。

台北の国家電影中心では貴重な中国語映画の映像を目にすることができた。具体的には、葛蘭・グレース・チャンの主演の未DVD化映画である『金鳳凰』『金縷衣』『長巷』『唐伯虎與秋香』『酒色財氣』『關山行』『鑽石花』などである。これらによって今後の論文に役立つ貴重な発見を得た。また、香港・浸会大学の陳智廷氏の誘いで、国家電影中心で特別に映写された台湾映画『多桑 父さん』(1994年)のフィルム上映を見ることができた。さらに同映画の監督である呉念真監督からも話を聞くことができたのは収穫であった。

その他にも、「懐メロ」コンサートや講演会、映画祭などで、台湾における映画や「懐メロ」文化のあり方の現状についても知識を得た。6月には台湾弦楽団ATSによるコンサート『台湾歌謡』を鑑賞した。台湾の各時代を代表する楽曲が弦楽にアレンジされて演奏されたこのコンサートからは、台湾人にとっての懐メロのイメージが浮き彫りとなっていた。9月には、台湾を代表する映画監督である李行監督映画にまつわる楽曲を集めたコンサート「行影如歌～李行導演電影音樂會」を鑑賞し、台湾人にとっての懐メロ、映画と音楽との関わりなどについての理解を深めた。12月には、台湾と香港の映画音楽界で活躍した作曲家・周藍萍を記念するコンサート「聲情詠戲—周藍萍的臺灣小夜曲」を鑑賞し、その映画史・音楽史における重要性を再認識した。周藍萍の娘・周揚明氏との知遇も得て、この作曲家に対する理解を深めた。2019年1月には台湾音楽館において、台湾語歌謡を代表する作曲家・許石についての特別展が開催された。それを記念してセレモニーが行われたが、その際、許石の娘で日本で暮らしている許碧娜など、数多くの音楽関係者から話を聞くことができた。

6月から7月に開催された台北電影節(映画祭)でも多くの映画を鑑賞し、台湾映画の現状について理解を深めた。また、新北市立図書館三重分館や、空軍三重一村(軍人村を整備した文化スペース)などで度々開催された音楽講座・トークショーなどで台湾の音楽家の話を伺った。1960年代、台湾・日本・香港を股にかけて活躍した俳優・歌手の林沖氏からは、図書館での講演以外にもしばしばお会いする機会があり、当時の日本・台湾・香港各地の映画界の状況について貴重な話を伺った。

アウトプットとしては、郭強生の長篇小説『惑郷の人』の翻訳を完成させ、出版したことが最も大きな成果である(名古屋の出版社、あるむより2018年11月刊行)。この小説は、台湾で生まれ育った日本人(湾生)、中国大陸から台湾に渡った軍人などの故郷喪失者が描かれ、日本とも関わりの深い小説である。台湾滞在中、作者の郭強生氏に直接質問して疑問点などを確認することができたことは幸いであった。また雑誌『印刻文學生活誌』の郭強生特集号にも『惑郷の人』訳後記を寄稿し、日本の「翻訳ミステリー大賞シンジケート」というサイトにも、「訳者自身による新刊紹介」を掲載していただいた。また、未公開ではあるが郭強生氏の短篇小説「罪人」の翻訳も本研究期間中に進め、2019年7月に刊行される雑誌『植民地文化研究』に掲載される予定である。

その他、音楽家の雷光夏氏との知遇を得て、同氏がパーソナリティを務めるラジオ番組「聲音紡織機」に出演したことも、日本と台湾の流行音楽史を考える上で大きな示唆を得る体験であった。一回目の出演は5月で、映画と音楽、日本華僑と流行音楽、中国語歌曲と世界というテーマでトークを展開した。二回目の出演は11月であり、世界に広まった中国語と日本語の楽曲について話した。三回目は3月に出演し、1990年代の(主に日本と台湾の)音楽を回想した。雷光夏氏との会話やリスナーの反響などからも得るものが大きかった。

学院留学中は、台湾のみならず香港でも資料調査を行い、当地の研究者と交流した。

最後に、台湾滞在中に会うことができた方々の名前を列举し、感謝を表したい。李行(映画監督)、侯孝賢(映画監督)、呉念真(映画監督、脚本家)、畢国智(映画監督)、朱天文(作家・脚本家)、朱天心(作家)、郭強生(作家)、彭樹君(作家)、李琴峰(作家)、林沖(俳優・歌手)、岳華(俳優)、恬妮(女優)、甄珍(女優)、雷光夏(音楽家)(以上、敬称略)

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構 (NUC)

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に

報告用紙①

支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。